

【資料】

旧宗像市民俗資料館について

平松秋子

1. はじめに

平成22年3月31日、22年間の歴史に終止符を打って宗像市民俗資料館は閉館した。宗像市で唯一存在した実物の資料館であった。民俗資料の宝庫といわれる玄海灘沿岸の鐘崎にあり、地元の人々は日本海沿岸の海女の発祥の地だと自負し、鐘崎文化を象徴する施設だと誇りに思っていた資料館である。

閉館に際して地元からは「民俗資料館は、この鐘崎の風土を体感できる場所にある。海女や漁業関係の資料の展示はこの場所でなければ意味がない」と存続の必要性を訴え、署名活動が行われた。資料館を見学に訪れた多くの見学者からも、「海のすぐそばにあって、周囲の環境と解け合い、海女や船に関する資料など貴重な展示品を見ることができる」という感想が寄せられ、閉館は惜しいという意見が多く寄せられた。

閉館という事態を受けて、収集された資料の公開は今後どのようにしていくのか。宗像市では、宗像大社の近くにある「アクシス」を改修して郷土文化学習交流施設(仮称)とし、その中の1室を文化財展示室にあてるとしている。多くの文化財がある宗像市の場合、展示室のスペースは十分であるとは言えず、民俗資料の展示は限られたものになると思われる。そこで、筆者は、これまで民俗資料館が歩んできた歴史と、収集された資料や行われた事業について振り返るとともに、今後、民俗資料の公開をどのような形で行っていけばよいかについて、考えてみることにした。

2. 宗像市民俗資料館の自然的環境

福岡県宗像市鐘崎は福岡県の北部に位置し、玄界灘に面した弓状の海岸地帯にある。鐘崎の最北端にある「鐘の岬」は玄界灘に張り出した半島である。ここには織幡宮があり、平安時代に編纂された『延喜式』にも宗像大社に次ぐ神社として社名がある。漁業に従事する人々の心のよりどころとして、また地域の氏神様として親しまれ、毎年4月には春祭も行われている。この海岸の続きに県内最大の漁港・鐘崎漁港があり、地島行きの市営渡船場も設けられている。大島と鐘崎の間の海域は航海の難所であり、万葉集にも『ちはやぶる鐘の岬を過ぎぬともわれは忘れじ志賀の皇神』と詠まれている。『続日本紀』767年8月の条には、宗像朝臣深津とその妻竹生王（皇族とされる）が僧寿庵に勧められ「鐘崎船瀬」（船が停泊するところ）を造り官位を授かったとある。中世以降はこの海女が活躍し、その名を現在に残している。鐘崎漁港の西側の小高い砂丘には鐘崎貝塚があり、縄文時代の土器が出土し描かれた文様が標識土器となっている。この海岸砂丘は全国白砂青松百選にも選ばれた五月松原へと続き、神湊へ至る。

古代から続くこの海辺に宗像市民俗資料館であった建物が今もある。二つの切り妻屋根に挟まれて中央を玄関とし、その上層は総ガラス張りの尖った三角の塔が空へ向かって伸びている。のどかな漁港風景の中に近代的な建物が目を引く。

3. 鐘崎海女について

鐘崎はその昔、宗像海人達の中心地であったが、また日本海沿岸の海女の発祥地といわれている。「海人」とは古来漁撈に携わっている人々を総称して「海人（アマ）」と呼んでいた。魏志倭人伝には、西日本沿岸の海で見られた「潜水漁法」の様子を記している。「潜水漁法」とは素潜り漁のことである。「海人（アマ）」には次のものも含まれる。「海士（アマ）」とは素潜り漁をする男性のことで、また、「海女（アマ）」とは素潜り漁をする女性のことを指す。

鐘崎海女の起源についてはいくつかの説があり、①今日でも海女漁が盛んに行われている韓国の済州島との交流によって伝わった。②南方民俗が家船（えぶね）で移動しながら最終的に鐘崎に定住し、海女漁を始めたなどの説がある。鐘崎漁業協同組合によると、平成23年1月現在「海士」はおよそ20人、「海女」は2人であるという。海女の数が減ってきて、このままでは伝統ある鐘崎海女が消えていくという深刻な状況にあるということである。

今から3500年前の縄文時代後期の鐘崎貝塚からは、サザエ・アワビ・ハマグリ・アサリ・アカガイ・カキや淡水産のシジミなどの貝が大量に出土している。鐘崎の人々は豊かな海の恵みを得ながら暮らしていた様子がわかる。

魏志倭人伝にあるように、素潜り漁は漁業では最も古い漁法である。その素潜り漁をする海女について、江戸時代の国学者・貝原益軒は『筑前国続風土記』（1706）の中で、糸島から芦屋までの漁村のうち、鐘崎、大島、波津、志賀島の4カ村で女性が海女として働いているが、特に鐘崎の海女は漁が上手であると書いている。

海女の人数は、江戸時代には約300人、大正時代には約200人、昭和13年の調査では130人いたが現在ではわずか2人である。

鐘崎が日本海沿岸の海女の発祥地とであるという由来は次のようなことによる。鐘崎海女の特性はアマアルキ（出稼ぎ）と潜水技術の優秀さにあるといわれる。鐘崎はもともとアワビやサザエの生息する磯場が少なく、海女達は漁場を求めてアマアルキを行うようになり、その場所に定住したり、自分が持っている技術を伝えたりした。鐘崎がルーツであると伝えられる海女浦は石川県の輪島や山口県の大浦、長崎県対馬の曲、壱岐の小崎など4カ所の浦がある。このアマアルキこそが鐘崎が日本海沿岸の海女の発祥地といわれる由縁である。アマアルキは日本海ルート、対馬ルート、五島ルートの三方向があった。また定住した場所は枝村と呼ばれている。「鐘崎おなごはよく働く」といわれ、鐘崎海女のたくましい活躍が伝えられている。

4. 民俗資料館の運営

資料館の閉館までの経緯はつぎの3期に分けられる

4.1 1期

期	期間	館の名称	館長	場所	入場料
1期	昭和63年6月1日 から 平成8年5月20日	玄海町立 民俗資料館	日並 文夫	玄海町上八762	無料
	昭和62年町立幼稚園の合併で廃園になった旧岬幼稚園舎を転用 地域日の人々の熱い思いと関係者の熱意で玄海町始まって以来の民俗資料館が開 館した。開館日は日曜と水曜、その他は連絡して来館する。ケースの中をただ見るだけ の展示ではなく、触れて動かして試してみる生きた資料館を目指して動き出した。				

1期の事業内容

これまでに収集した資料と、町民への呼びかけで集められた資料を整理分類して展示が行われた。本館は海女・鐘崎貝塚遺物を、1・2号室は農具、3号室は民具、4・5号室は漁具で、展示資料の合計は446種1,057点であった。

4.2 2期

期	期間	館の名称	館長	場所	入場料
2期	平成9年4月1日 から 平成15年3月31日	玄海町 民俗資料館	中村清	鐘崎776番地4	大人200円 小中学生 無料
	国の沿岸漁業活性化事業の許可が下り、鐘崎漁港港湾設備事業の一環として、新 「美しい漁村モデル事業」の郷土文化伝習施設として新築された。鉄筋コンクリート造り で4階建て。玄界灘を背景に建てられたため資料館の中からも海が眼下に見える。 総工費 346,511千円 国補助金 196,840千円 残りは地元負担 延面積 1146.57㎡				

2期の事業内容

平成9年度

- ・4月から1年間企画展示「和船のできるまで（船大工道具）」

船大工道具 64種類の展示

（3月29日 4月開館前日イベント） 「海人今昔ものがたり」

アクシス玄海 「海と緑のホール」で開催

「海」について 中山千夏氏・高田茂廣氏の対談

5人によるトークショー 中山千夏 高田茂廣

長野亜矢 中橋義幸 他1名

- ・7月27日 講演会「鐘崎海女の活躍と生活」講師 広橋新三
- ・10年2月22日 親子風づくり教室 講師 今村正彦

平成10年度

- ・7月下旬から8月上旬「子供盆踊りの指導」
平成3年11月に福岡県指定文化財（無形民俗文化財）とされた
鐘崎盆踊りを継承・発展させることを目的
指導者 踊り・花田千鶴子 太鼓・花田圭助
- ・10月から半年間企画展示「鐘崎海女の足跡をたどる」
鐘崎の枝村の海女道具と人々の生活
- ・11年3月28日 親子風づくり教室 講師（前年に同じ）

平成11年度

- ・5月から11年3月まで企画展示「貝殻」
50年間収集した貝殻の寄贈品・玄界灘に生息する貝200種の展示
- ・11年7月下旬から8月上旬「子供盆踊りの指導」指導者(前年に同じ)

平成12年度

- ・5月から13年3月まで企画展示。
テーマ「海女・対馬・輪島・済州島」写真や文章パネルを使って展示を行った。
「曲の海女・対馬」「姉妹縁組に調印・済州島」
「海女の移住先・輪島、対馬」「筑前国海女漁業景況図」（福岡県漁業誌）
明治11年「ノシアワビの製造図」など
- ・7月下旬から8月上旬「子供盆踊りの指導」指導者（前に同じ）

平成13年度

- ・5月から14年3月まで企画展示「鯨漁」 図や文章パネルを使用した。
「クジラ解体図」「地の島の捕鯨」「大島の捕鯨」「江戸時代の捕鯨の方法」
「鐘崎海士の活躍」童謡詩人・金子みすゞの「鯨法会」「鯨捕り」二首を紹介
- ・7月下旬から8月上旬「子供盆踊りの指導」指導者（前年に同じ）

平成14年度

- ・5月から14年8月まで企画展示「海づくり・土づくり」
波止・釣川・松林・伊能忠敬・堤をキーワードに
- ・7月下旬から8月上旬「子供盆踊りの指導」指導者（前に同じ）
- ・15年2月13日 当館にて民俗資料館運営協議会を開催
（出席者） 館長 中村清・石井忠・日並文夫

4.3 3期

期	期間	館の名称	館長	場所	入場料
3期	平成15年4月1日 から 平成22年3月31日	宗像市 民俗資料館	平成16年度まで中村清 その後市民活動推進課 課長兼任	鐘崎776番地4	大人200円 小中学生 100円
	宗像市との合併により建物はそのまま名称のみ変更。しかし合併後7年で惜しまれながら閉館となる。理由は宗像市が世界遺産登録を目指し、宗像大社周辺の既存の建物を使って、文化財展示施設を備えた郷土文化学習交流施設(仮称)を計画したことによる。				

3期の事業内容

平成15年度

- ・10月から11月まで宗像市・玄海町合併記念企画展示

「鐘崎の海女―東アジアの海人文化交流」

- ・11月2日 講演 アクシス・海と緑のホールにて

伊東彰 「鐘崎の海女の歴史とくらし」

李善愛 「済州等の海女の歴史とくらし」

シンポジウム「東アジア世界における海女の歴史と活動」

コーディネーター 石井忠

平成16年度

国の緊急雇用対策で館員を雇用し収蔵庫の民具の整理を行う。

「学力向上フロンティアスクール」の公開授業に館長参加。玄海東小学校6年生が対象。

「伊能忠敬と日本地図」のテーマで社会科学習指導を行う。

平成17年3月をもって中村館長が退館。その後は市民活動推進課課長が館長を兼務することになり、資料館の現場では館長不在となった。

平成17年度

大規模な展示替えをする。新たに古文書の調査と目録作成にとりかかった。

平成18年度

古文書目録作成「山口家文書」

1階は海人と漁具類に2階は船や海をテーマにして展示替え。

平成19年度

- ・7月から9月まで企画展示「海辺の玉手箱一貝がら展」
- ・8月4日 講演会「貝のおはなし」講師 広田俊実
- ・11月から12月まで企画展示「海辺の考古学—ムナカタ海人族の足跡をたどる」
- ・11月10日講演会「ムナカタ海人の足跡をたどる」
講師 市民活動推進課 白木英敏

平成20年度

市民から民具の寄贈があり、その整理と資料カードづくりと古文書「吉田家文書」などの解説。

平成21年度

閉館が決まり貴重な民俗資料の散逸を防ぐこと、また漁撈具と船・大工道具を国の登録有形文化財の指定を受けるために作業が進められた。目録を作成して申請をおこなった結果、平成22年3月11日、国の登録有形民俗文化財に指定された。漁撈用具969点、船大工道具340点合わせて1,309点である。宗像市民俗資料館は平成22年3月31日、21年間の歴史に終止符を打った。

5. 民俗資料館に収蔵された資料

下記の3区分で示す。

福岡県指定文化財は10項目13点である。海女が船上で体を温めるために使った「いそひばち」に乗せて使う「ごとく」と、海女が潜水時に使用する「みずめがね」を入れる木箱、「あわびがね」の内1本の3点が付属品である。

今回、国の登録有形文化財として1,309点を申請し登録指定になった。これは閉館に伴い、収集された貴重な資料の散逸を防ぐ目的からである。

その他の収蔵品とは、民具など、鐘崎以外にも市内全域からの寄贈品、保管の依頼をされた資料を指す。

5.1 福岡県指定文化財（海女用具）13点

資料名は申請書に基づく。

写真がない物は「むなかた電子博物館」くらしと共にあった道具を参照。

（海女用具）末尾に付図1として掲載

5.2 国の登録有形民俗文化財1,309点の内訳

5.2.1 漁撈具969点の明細

（漁撈具969点の明細）末尾に付図2として掲載

5.2.2 船大工用具340点の内容

（船大工用具340点の内容）末尾に付図3として掲載

5.3 その他の収蔵品4,535点の明細

文化財係で整理作業が継続中で点数は23年1月18日現在のものである。

(その他収蔵品の表) 末尾に付図4として掲載

6. 宗像市における今後の民俗資料の保管収集

収蔵された資料の総数は5,857点である。福岡県指定文化財や、国の有形民俗文化財などは、今後、平成24年度に開館される郷土文化学習交流施設（仮称）の展示場で点数に制限はあるものの、公開展示される予定になっている。その他の資料についてはこれまで通り旧宗像市民俗資料館の収蔵庫で保管されることが決まり、宗像市文化財係では現在も資料の整理が行われている。

今後少人数となった海女からの聞き取り調査や、民具の収集などを地元の協力を得て文化財係で行っていく予定だということである。

7. まとめ

今回の調査により、宗像市民俗資料館が歩んできた22年間の歴史を明らかにすることができた。開催されたイベント等は23回に及び、収蔵された資料の総数は5,857点であった。残念なことにそれらの資料を収蔵する宗像市民俗資料館は閉館となった。消えていく地域文化を蓄積・保存しデジタルコンテンツにして子供達の学習や生涯教育の場で利活用していくことが望まれる。

民俗資料の宝庫といわれる鐘崎にあり、海女の資料館としても著名であった旧宗像市民俗資料館。この宗像市が収蔵した民俗資料を、インターネットを通じて多くの閲覧者に紹介し、将来に渡り伝統ある文化を守り伝えていくという役割を、むなかた電子博物館は果たすべきである。

なお、旧宗像市民俗資料館の建物は、外観は現状のまま平成23年度より岬地区のコミュニティセンターとして活用されることが決まっている。二階にあった収蔵庫は民俗資料の保管場所としてそのまま継続して使用できることになっている。地域の人々が集うコミュニティセンターとしての再出発を、地域アイデンティティの喪失の場としてほしくない。むしろ民俗情報収集の拠点として、郷土文化学習交流施設（仮称）との連携事業を考えてはどうか。

民俗資料館の建物がそのまま残り、2階の収蔵庫の資料も鐘崎の地に残るということで、とりあえず安堵した。そして、ある書物が脳裏をよぎった。

風景とそれを視る人との関係について書かれた私の恩師、柏倉康夫先生の近著『評伝 梶井基次郎』である。その副題に「視ること、それはもうなにかなのだ」とある。旧民俗資料館の特徴的な三角屋根の建物は、それを目にする鐘崎の人々にとって、いつまでも自分自身のルーツを感じさせる「なにか」であって欲しい。

おわりに、この調査研究にあたって、旧宗像市民俗資料館勤務で現在宗像市文化財係臨時職員の花田悦子氏には、資料提供や助言を頂き大変お世話になり厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 石井忠 「玄界灘の海人」『日本民俗写真体系』6巻 東シナ海と西九州
日本図書センター 2000
- 柏倉康夫 『評伝 梶井基次郎』左右社2010
- 鐘崎漁業誌編纂委員会 『鐘崎漁業誌』1992
- 鐘崎漁業協同組合 『鐘崎海女』1998
- 楠本正 『玄海の漁撈民俗 労働・くらし・海の神々』海鳥社1993
- 玄海町誌編纂委員会 『玄海町誌』1985
- 玄海町史話伝説編纂委員会 『玄海町史話伝説』1995
- 日並文夫 「海女のふるさと鐘崎」『ふるさとの自然と歴史』7号 1992
- 日並文夫 『米寿・高齢者叙勲記念』1999

付図 『旧宗像市民俗資料館について』 平松秋子

付図1 海女用具

	資料名	使用法
1	あたまかぶり	・頭部の保護、黒糸で「大」の字を刺す
2	いそじゅばん	・潜水時に着る肌着、後に氏名、生年月日、年齢が書かれている
3	きりがい	・貝の内側に「あてがい・きりがい」の文字と氏名海中での目安に置く
4	いそおけ	・採集したアブビやサザエを入れる
5	いそむばち	・板、瓦、粘土で作成。海岸の流木を使い船上で暖をとる為の用具。鐘崎海女のための使用
6	ごとく (いそむばち用)	・火鉢に入れてやかんなどをかける
7	はちこなわ	・稲藁で作った腰縄。捕獲したものを挟み魔除けでもある。よりを16節にして2つつつ数えると8
8	いそべこ	<p>・潜水の時に着ける下着(フンドシ) 魔除けのため6つのヒトデ型の図を糸で刺す</p> 
9	あわびぶくろ	・獲物を入れるための木綿糸で作られた袋。たすき掛けにして使う
10	水めがね	・水中を見るための鼻覆いひとつメガネ
11	水めがね入れ箱	<p>・海女個人の秘蔵の水めがね入れ、氏名あり</p> 
12	あわびがね (長さ53cm×幅3cm)	<p>・あわびを探るときに使う</p> 
13	あわびがね (長さ19cm×幅3cm)	

付図2 漁撈具969点の明細

区分	用具別・点数	用具の詳細	点数
①	磯物採取用具146点	貝採取用具	9点
		海藻採取用具	62点
		その他採取用具	17点
		海女漁の用具	58点
②	突漁用具6点	突漁具	6点
③	陥穽漁用具63点	かご漁用具	36点
		つば漁用具（タコつばなど）	27点
④	釣漁用具219点	釣漁用具（仕掛け）	107点
		延縄漁用具 浮標（ハッポウ） 浮子	79点
		船曳釣漁用具 （ヒコーキ・潜行板）	22点
		その他釣漁用具	11点
⑤	網漁用具127点	網漁用具	50点
		地曳網漁用具（振り木）	12点
		その他網漁用具	65点
区分	用具別・点数	用具の詳細	点数
⑥	その他の用具45点		45点
⑦	漁具製作修理用具 24点	網製作・修理用具	24点
⑧	水揚げ・加工・販売用具 112点	水揚げ関係用具	77点
		加工用具	24点
		販売用具	11点
⑨	船及び船関係用具 198点	船	2点
		船付属用具	165点
		船上用具	33点
⑩	信仰・儀礼用具17点	信仰・儀礼用具	17点
⑪	仕事着10点	仕事着	10点

付図3 船大工用具340点の内容

⑫	船大工用具340点	船図	10点
		墨掛用具	30点
		加工用具	161点
		接合用具	97点
		防水加工用具	9点
		固定用具	20点
		その他船大工用具	13点

付図4 その他収蔵品の表

区分	用具・その他・資料の区分		点数
1	海女用具		21点
2	漁具		103点
3	船大工用具		202点
4	農具		401点
5	民具（吉田家分230点を含む）		2,329点
6	漂着物		299点
7	出土品		110点
8	その他		15点
9	山口文書	文学資料	619点
		絵図資料	41点
10	吉田文書	文学資料・絵図	395点
合計			4,535点